

# 下北沢で私も生まれ、子供も育った

平成19年1月5日

原告 三枝 春美

## 1 はじめに

私は、この訴訟の原告の一人で三枝春美と申します。

絵画制作ならびに、自宅でおよそ27年間絵画教室をしております。

1947年代沢2丁目の自宅で生まれました。戦後のベビーブームで、お産婆さんが大活躍をした時代です。

## 2 生まれ育った下北沢

1976年、北沢1丁目に小さな自宅を構えました。主人共々、実家に近いこと、この生まれ育った下北沢の環境で、今度は自分たちで子育てをしたいと思ったからです。

子供のころの下北沢は今より有名であったかもしれません。生鮮食料品の店がたくさんあり、それぞれが価格、鮮度で競い合い、また何件かあった生地屋には、当時珍しい品物か揃い、各地から買出しに来ていました。映画館も4件あり、学校の貸切映画教室が行われ周辺各地の生徒が訪れていました。

当時の下北沢・三軒茶屋には本屋・古本屋が多数あり、柳行李一つで下宿していた学生たちにとっては、この活気ある、物価の安い下北沢は大変暮らしやすい街でした。

下北沢はこうした地元の人々の活気と、地方から集まってきた人々の生活する工夫が融合しあってできた、他に類の無い生活文化圏が築かれた街だと思います。

## 3 子供達の下北沢

我が家の子供達もこの街で育ちました。古くからの住宅地と商業地が入り交ざり、まるで落語にある長屋のように、ご近所同士、お惣菜が行きかうこともありました。今も、朝の早い通学路途中のお豆腐屋のおかみさんは、必ず子供たちに“行ってらっしゃい”と声掛けをしてくれます。こうしたとても暖かい人々の交流の中で、子供たちは、しっかりと育ってきたと思います（写真資料1）。

元気な挨拶が飛び交い、子供たちが安心して歩ける街は、戦後 60 年をかけて商店街や町内会、PTA、神社、教会、お寺、ボーイスカウトなどの地道な活動努力によって作られてきたものです。街はまるで人が作る生き物そのものです。

もし、このコミュニティーのど真ん中に、幅広の大きな道路が作られ、人々の交流を断ち切るようなことが起こると、例えば、子供たちに人々の目が届かなくなります。こんなことで、果たして治安は守られるのでしょうか。子供たちは安心して外で遊べるのでしょうか。

#### 4 子供のこと

去年の秋、強風の翌日、美しい青空のなか、久しぶりに環七雲が連なって浮かんでいるのを見ました。皮肉なことに、空気が澄んでいたからこそ、公害雲が見えたのです。実は常に道路上には排気ガスが連なっているわけです（写真資料2）。

私の息子は長らく気管支喘息で公害認定を受け、幼少のころは入退院を繰り返しました。実に 30 回以上に及びます。

高校受験も入院中の病院からいたしました。受験当日、病院に息子を迎えに行くと、看護師さんがそっと昼食のおにぎりを渡してくれました。本来、親がすべきこと、でも動転していてとても昼食まで気が回りませんでした。今でも本当に感謝しています。

その都立病院も赤字を理由に廃止されました。私は、困っている子供たちが救えるなら、個人的には税金が病院の赤字に使われても異論ありません。

しかし、貴重な税金を使って、無駄な道路を作り、街を破壊することには反対

です。

## 5 おわりに

私たちの時代に、これ以上交通公害をふやして、人間と自然を蝕むようなことをしてはならないと、切に願います。

何百年をかけて成長した大樹でも、切り倒してしまったものは、二度と元には戻りません。永久に消え去ってしまうものです。

戦後ゆっくりと成長してきた下北沢を破壊しないでください。

以上



1. 地域社会に見守られながら子供は育ちます



2. 常に途切れることのない車の列（環七）。  
排気ガスのため、洗濯物を干すことすらできません。